



帰してはいけない小児外来患者 2 子どもの症状別 診断へのアプローチ

東京都立小児総合医療センター 編
本田 雅敬, 三浦 大, 長谷川 行洋,
幡谷 浩史, 萩原 佑亮 編集代表

● A5・頁 272 2018 年 3 月
定価：本体 3,800 円＋税
[ISBN978-4-260-03592-7] 医学書院刊

われわれが外来診療や救急診療で診る患者の中には、ごくありふれた症状が主訴で一見軽症のようにも思われるが、実は緊急度が高く、家に帰してはいけないケースが存在する。帰してはいけないケースを帰しそうになったが思いとどまった経験や、見逃してしまった苦い経験の一つや二つは思い起こされるのではないかとと思う。小児科医なら誰しも、発熱の患者で髄膜炎を見逃すな、腹痛の患者で虫垂炎や腸重積を見逃すな、というように、症状ごとにいくつかの見逃してはいけない疾患に注意して診療に臨むべきことを指導医から何度となく教えられてきたことだろう。しかし、どうすれば緊急度の高い疾患を見逃さなくなるか、ということまでは教わっていないのではないか。本書は、外来診療で家に帰してはいけない子どもを見逃さないようにするための“心構え”を教えてくれる。

本書は2つの章によって構成される。第1章では、患者・保護者の訴えや話を聴く心構えと、帰してはいけない患者を見逃さないようにするための、診療の一般原則が解説されている。第2章では、小児の一般外来診療、救急診療でよくみられる17の症状別に診断へのアプローチが説明され、帰してはいけない症状や徴候(red flags)、注意すべき症状や徴候(yellow flags)が明確に示されている。総論の後にはいくつかの症例が呈示され、臨床推論の過程が具体的に述べられており、診療の一般原則が個々の症例においてどのように実践されているかがわかる。取り上げられている29症例の中には読者が経験したことのない疾患があるかもしれないが、症例呈示と解説を読むと、たとえ未経験の疾患

であってもその臨床像を把握することができるだろう。

本書の優れているところは、帰してはいけない子どもを見逃さないために臨床検査や画像検査に走るのではなく、問診、バイタルサイン・生理学的徴候・外観の評価、身体診察、経時的变化の観察を丁寧に行うことが重要だという基本姿勢が貫かれている点である。帰してはいけない子どもを的確に見つけることは、裏を返せば、帰宅させてよい子どもを帰す判断ができるということにつながる。症状別の総論では、安易に帰してはいけないポイント(red flags, yellow flags)とともに、帰してよい子どもを見極めるポイントについても説明されている。加えて、保護者への説明の要点についても解説されており非常に実践的である。若手の小児科医が一人で外来診療や当直を任されるようになったとき、いま自分が診ている患者を帰宅させてよいと判断するためのヒントを、本書は教えてくれる。総論には、患者の全身状態を評価するために参照すべき、バイタルサインや血圧の年齢別基準値、Glasgow Coma Scale, Japan Coma Scaleなどが掲載されており、臨床現場での使用にも堪え得る。

このように、本書には帰してはいけない患者への気付きを高めるための要点が満載されている。学生や研修医、小児科専攻医にとっては、症候別の診断へのアプローチや臨床推論を学ぶ小児科診断学の指南書ともなるだろう。読者の皆さまには、自らの診療経験や診療姿勢を振り返りつつ、診療の質をさらに向上させ、診断の精度を高めることにおいて本書を活用していただきたいと思う。